

# 子どもが変わったということ

山下俊郎



太平洋戦争後の子どもは、戦前の子どもにくらべて変わったとよく言われる。たしかに、変わったこともある。それから、戦後三十年の間にも、変わったこともある。

まず第一によく言われることは、いわゆる発達加速現象が著しいということである。わたくしたちは、たしかに子どもの発達が戦前にくらべて、また戦後の三十年の間にも、早く発達する傾向は、ある面においては、はっきり認める。この傾向の認められる最も著しいのは、身体発育の面である。身長、体重、胸囲、頭囲等のいわゆる身体計測的面において、戦後の昭和三十六年に厚生省が発表した数字は（三十五年の計測値の集計結果）、戦前の計測値の一歳年長の幼児の数字とほぼ等しく、一年の発達加速があると言われていた。そしてさらに、昭和四十六年の厚生省発表の数字（四十五年計測値の集計結果）を見ると、十年前にくらべてさらに一層大き

くなっている。

このことは体位の向上と言われる事実であって、主として栄養の改善の結果であると言われて来ている。しかし体は大きくなっても、体力と運動機能においては、けっしてよくなっていない。体位が比較的によい、全国平均をはるかに上まわっている幼児集団である一つの幼稚園児について、十年間にわたる運動能力の継続的計測の結果について、検討してみた結果、その能力はようやく戦前の幼児の平均値に達するか、それ以下であって、しかも忍耐力や持久力を要するような運動では、ことにその低下が目立っていることを、わたくしたちは昭和五十年度の日本教育心理学会総会で発表した。また、日本保育学会が、昭和二十九年と昭和四十四年という十五年の間隔を置いて、全国のサンプル七千余の幼児について研究した運動能力の資料を見ると、十五年の間に発達加速

現象は見られない。調査項目二十九項目のうち十三項目は横這い状態、十三項目はかえって低下していて、三項目だけがわずかに進んでいる。(日本保育学会著『日本の幼児の精神発達』——保育学講座第九巻、フレール館刊参照)

また、知的発達においても、日本保育学会の研究の結果には加速現象は現われていない。そして悲しむべきことには、社会的発達においては、学会の研究結果では、十五年の間にむしろ低下しているのである。

世の一般の人々は、この頃の子どもは変わったというとき、昔の子どもにくらべ、身体的にも精神的にも進んで来たということの意味していることが多い。それから、現象面において変わって来たと言うことが多い。現象面というのは、新しい言葉をよくしゃべるとか、遊びが変わってきたとか、大変気の利いたことを話すとか、大人もかなわないうようなことをよく知っているとかが、といったようなことを意味していることが多い。しかし、わたくしたちは身体が大きくなったことだけは認めるが、その他の面、身体運動という、身体については機能的な面と、精神的なすべての面において現われ

ている変化は、けっして好ましいものではないと思う。それらはすべて、生活環境の変化、生活様式の変化のそのままな変化を反映しているものだからである。一例を挙げると、自動車に乗って外出することが多いから脚力が弱くなっている。低俗なテレビ漫画ばかり見ているから、変てこな言葉や行動はすぐ模倣されるから、昔の子どもと違った拳動が目立つのである。

幼児保育は、環境による教育であるというのは、わたくしの以前からの持論であるが、けっして好ましいとは言えない現在の生活環境を、幼児のために好ましいものに変革して行く努力を怠らないことが、保育者の義務であるとわたくしは考える。極端な言い方をすれば、幼児を商売のために毒するような環境が現在の環境であると言える。保育者は、幼児の発達とはどのようなものであるかを、しっかりと把握して、その発達を望ましい方向へ進めて行く責任を持っている。発達の基本は同じ方向を目指すものであることに変わりはないのであるが、それを毒しているものが現在の環境であること、を、わたくしたちは深く反省し、研究と精進を積み重ねて行くことが、保育者に課せられている課題であると思う。